

グローバル教育コンクール2009

活動報告部門

グローバルシチズンシップ育成への取り組み

関心・共感・学び・行動



青森県立むつ工業高等学校

地歴公民科 南澤 英夫

グローバル・シチズンシップの育成へ
青森県立むつ工業高等学校
地歴公民科・国際理解愛好会顧問 南澤 英夫

1 研究主題

「私たちの日本語はおかしくないですか？」

1995年私はパラグアイに来ていた。そこで日系人3世の子供たちと話をする機会があった。15・6歳の高校生の女子生徒が言った言葉を今でも忘れない。

私は耳を疑った。参加した生徒の多くが「召し上がりますか?」「もう行かれましたか?」といった、「ら抜き」ではない丁寧できれいな日本語を話していた。だからこそ、その生徒の言葉には耳を疑ったのだ。驚いて理由を聞いたところこんな答えが返ってきた。「友達が最近日本に行ったのですが、そのとき日本で出来た友達に、あなたの日本語おかしい。おじいちゃんやおばあちゃんと話しているみたい。今は誰もそんな言葉使わないよ。と」

そのため、自分たちの使っている日本語が正しいのか、おかしくないのかが気になっていたというのだ。皆さんの言葉は「美しい日本語」です。とコメントした後、あることに気付いた。私たちは日本生まれの日本育ちの日本人は黙っていても日本語を話し、日本的な感覚を持っている。しかし、外国に住む日本人が日本人になるためには、「日本人としての学びが必要なのだと」

帰国後、グローバルイシューや国際協力、開発教育を学んでいくうちに、私たちは地球人としての意識を持つための学びをしているのだろうかと考え始めた。

南北問題、貧困、感染症、経済のグローバル化、環境問題を始め世界の問題が密接に関係している中、地球人としての意識が育てることが必要だ。また、地球人としての学び（知識）がなければ解決の糸口さえ見つからない。そして、得た知識が行動としてつながらなければ解決に向けてすすむことはない。興味関心、学び、行動という3つが実践されることで、世界は変わると信じている。

今回は学校単位での実践、授業実践、課外活動指導の3つの実践を報告したい。教科としてグローバルシチズンシップに取り組める教科は「現代社会」または「総合的な学習」であろう。しかし、実際の教育現場では必ずしも自分で希望する教科を担当できるわけではない。そのため「日本史」「世界史」などの教科では、関連する内容を持つ単元の中で実施したり、テーマ学習として取り組んでいる。そのため、「〇〇教科」での実践とはならなかった。「世界史」「日本史」「現代社会」という多教科にわたる、数年間の取り組みとなった。

また、学校単位では生徒に世界について興味関心を持ってもらうため、世界の事を知るための行事を開催してきた。国際問題へ興味・関心を持つきっかけができるよう、全校生徒で考える場を設定した。学校行事として位置づけることによって、生徒のみならず教職員にも世界の今に関心を持ってもらい、そして、校内での参加協力を訴えてきた。

そして、国際理解愛好会の活動は、国際理解、国際協力活動を継続的なものとするためには、必要な活動であった。愛好会として活動することで継続的な学校単位の活動実践となっている。そして、国際理解愛好会では国際協力活動の実践と共に、様々な研究および研究発表を行ってきた。さらに、研究内容を映像として残すことで、さらに多くの人に興味関心を持ってもらう活動（発信する取り組み）を行ってきた。

私は授業や課外活動での「発信」と「行動変容」には大きな意味を感じている。高校生としてできる

こと、高校生だからできることを考える。そして、学びを単なる知識としてだけにするのではなく、「発信する」「行動する」ことにつなげ、学校、地域、国際社会に積極的にかかわり、社会変革の担い手としての意識を高めて欲しいと考えたのである。さらに、自分自身の成長、可能性を実感して欲しいと考えて計画している。

基本的な理念、方法論は「開発教育」「国際理解教育」をベースにしている。具体的には、社会に対しての興味関心、共感的な態度、批判的な思考、正しい知識とその知識に基づいた判断、そして、問題・課題解決に向けての思索、最後により良い社会づくりへの参画・行動という段階を考えている。

添付の資料映像について

添付した資料映像は、以下の内容が含まれている。生徒の思いや学習の成果が理解できる内容となっているので、是非ご覧いただきたい。

- ① 学習成果のまとめ
- ② 国際理解愛好会の研究発表
- ③ 平和学習
- ④ 伝えることから始める国際理解（CM 作り）



授業での取り組み

- 1 一般授業
 - ・ 命の授業・環境教育・紛争解決（戦争と平和）
 - ・ 南北問題・飢餓と貧困・格差・感染症 など
- 2 課題学習
 - ・ 環境問題解決に向けて
 - ・ 自分たちのできる「国際協力実践」
 - ・ メッセージ映像制作
 - ・ 平和祈念映像制作
 - ・ 薬物乱用防止広報啓発映像制作
- 3 個人研究
 - ・ JICA エッセイコンテスト
 - ・ 環境スピーチコンテスト
 - ・ 国連スピーチコンテスト など

グローバル シチズン・シップ の育成

愛好会活動

- 1 インド支援
 - ・ センター建設支援
 - ・ 絵本支援
 - ・ 環境問題支援
 - ・ 母親の自立支援
 - ・ 農村開発支援
- 2 カンボジア支援
 - ・ 絵本支援
- 3 研究発表
 - ・ 青森県高校総合文化祭
- 4 校外団体への協力要請
- 5 平和への取り組み
 - ・ 平和祈念映像制作
- 6 薬物乱用防止広報映像制作

全校での取り組み

- 1 インド・カンボジア支援
 - ・ センター建設支援
 - ・ 絵本支援
 - ・ 報告会（インド側の）
- 2 JICA との共同開催行事
 - ・ 青年海外協力隊講演会
 - ・ 国際回線を使つての
パネルディスカッション
- 3 地球のステージ
 - ・ 8年間連続講演
 - ・ 支援活動
- 4 生徒の研究発表大会
- 5 国際協力募金

2 各活動分野での実践報告

(1) 授業実践報告

本校をはじめとする多くの学校では「開発教育」「国際理解教育」「グローバル教育」がひとつの教科としてあるわけではない。そのため、「グローバル教育」に関連する項目がある単元で、「グローバル教育」の視点で授業を展開したり、「グローバル教育」で開発された優れた教材や手法を用いて授業を行っていると言うのが一般的である。

理想を言えば「グローバル教育」という教科があり、体系的に教えていくことができるのが最良なのだが、現実的には時間確保など多くの問題点があり、各教科内で工夫して取り組んでいる。授業実践では①一般授業で展開、②課題学習での展開 ③個人研究や発表 の3つの分野での活動を紹介したい。

① 一般授業での展開

一般的な授業では、単元に「グローバル教育」の視点や手法を持ち込んで授業を展開している。また、このような授業はその後の課題学習にもつなげることもできる。今回は一例として環境分野の授業での授業の展開を紹介したい。

(ア) 毛糸を使って考えよう

グローバル化する世界の課題を挙げ、その問題と関係していると思われる問題、課題を实际毛糸でつなぎ、問題の複雑さ、関係の深さ、解決方法の難しさを体験的に学習している。

- ・世界中で起きているさまざまな問題を考え発表（ここでは単に環境問題だけにとどまらず、世界規模で取り組まなければならない、グローバルイシューを取上げる。環境問題がさまざまな問題と関連していることを理解するため）

- ・考えられた問題の関係性を考える（関連あると考えられた各問題を毛糸でつなぎ、関連性と問題の複雑さを理解する）

(イ) 世界的な問題のブレインストーミングとウェッビング

ブレインストーミングはテーマから思いつくものをなるべく多く書き出す作業である。ウェッビングとはテーマに関係する事柄を出した後、個々の問題の関連性を考えながら線で結んでいく学習方法である。毛糸を使って考えた関係性をもとに、ここではテーマを「環境問題」として、グループごとの話し合いと発表が中心となっている。グループワークにより、お互いの気づかなかった点が出ると共にコミュニケーション能力も向上する。

(ウ) 調べ学習

「環境問題」について、自分たちでテーマを設定し学習していく

(エ) 視聴覚映像による知識の獲得

NHKや民放の環境問題を取上げた番組の視聴。・貧困・紛争などの問題を取上げ視聴。視聴覚教材による具体的な知識の獲得を目指す。

(オ) ランキング

今まで学習したことをもとに、「緊急性から見た、〇〇問題への対応策ランキング」「重要性から考える〇〇問題への取り組みランキング」などの発表を行い、学習内容について整理する。

(カ) 発信・行動

今回の学習テーマ。学習をもとに「自分たちでできる環境問題取り組み」を考え、今後の行動の参考とする。多くの意見を聞くことで、多様な視点と価値観を共有し、その中で「自分のできること

を出来るときに、無理なく、楽しく」行う、生徒自身の行動変容を目的としている。



毛糸を使って世界の問題の関係を考える授業



温暖化を食い止めるためのランキング発表

② 課題研究での取り組み

一般的な授業を行った後、その知識や思いを元に「自分たちでテーマを決定し、クラスとして取り組んだ実践」である。ここでは、現代社会での学びを元に、HR ごとに行った独自の実践と、日本史学習者が取り組んだ平和についての取り組み、さらに、環境問題を学んだ後に取り組んだ「環境スピーチコンテスト」の実践を紹介したい

(ア) 国際協力ボックスプロジェクト(本・CDのリサイクルを通じて) 3年機械科

- ・実施クラス 3年機械科
- ・プロジェクトの背景および実施方法

2005年にあった「ホワイトバンド・キャンペーン」に出会った生徒たちが、ホワイトバンドのように自分たちでできる国際協力を考え、実践したのが「国際協力ボックス」の製作であった。この国際協力ボックスで本やCDの回収し、リサイクルにまわすことで活動資金を生み出そうというものである。

リサイクルをすすめ、同時に世界の飢餓や貧困といった状況を、多くの人たちに知らせながら協力できるものとして「国際協力ボックス」が考えられた。

このアクションプランはクラスで行ったものであるが、活動は国際理解愛好会に引き継がれた。古本やCDはリサイクルされ1～2万円の支援金を確保することができた。支援金は本校が国際協力を展開しているインドの村落開発NGOのDRCSCに、保育園と識字教室などの機能を持った多目的施設建設の支援金として送っている。また、2006年、2007年、2008年は集めた絵本をインド、カンボジアに送り、保育園で活用するほか、識字教室でも活用されている。

生徒の国際協力ボックス制作にいたる過程や、国際社会に向けてのメッセージは青森県高校総合文化祭・国際理解部門の研究発表において発表した。また、その内容はDVDとして記録し、その後の国際協力ボックスについて理解していただくため活用している。

DVD【2005 3年機械科 僕らの国際協力】

「ホワイトバンドキャンペーン」とは、2005年に行われた、世界の貧困解決、累積債務解消を目指したキャンペーン活動である。実際には多くのアーティストや俳優、スポーツ選手がホワイトバンドを身につけ、メッセージを発信した。これは、直接援助ではなく、キャンペーンを通じた世論の形勢によって、政治を変えていこうというアドボカシーのひとつである。「ホワイトバンド」を購入することで貧困・飢餓解決の事業に協力し、「ホワイトバンド」を身につけることで、その問題に関心を寄せていることを意思表示することになる。



国際協力BOXを作った3年機械科（左）とBOXを利用し保育園で絵本をあつめる愛好会生徒

（イ）メッセージTシャツ・プロジェクト

- ・実施クラス 3年 電子機械科

「地球のステージ」というコンサート知っているだろうか？ 山形県在住の精神科医、桑山紀彦さんが世界中で見て、聞いて、体験したことを、自作の歌と映像をミックスしたコンサートだ。地球のステージの中で、多くの世界の問題が浮き彫りになる。その中で、地雷除去のシーンがあった。多くの地雷。傷つく人々

3年生の現代社会では、今まで、原爆と劣化ウラン弾（60年前の被爆者と今世界で生れる被爆者）、ダイオキシン問題、環境問題と自分達の生活、世界がもし100人の村だったら（ワークショップ版）、世界で拡大する貧困、国際協力の必要性和私たちのアクションプランなどを学習した。みんなのできる「3年電子機械科らしい・アクションプラン」を考えよう。そして、採用されたアイディアがメッセージTシャツ。

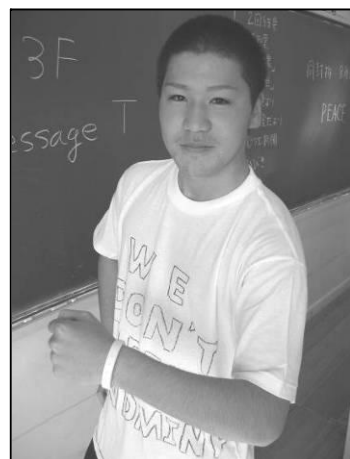
写真やコンサートはその場に来てもらわないことには伝わらない。そんなに関心がある人だけではない。忙しくて時間がない。しかし、Tシャツならメッセージを伝えられる。

自分自身の思いを、自分自身のデザインで、自分自身の手で地雷廃絶のメッセージTシャツを生み出した。

国際社会や国際貢献に対し何もできないのでは？と考えていた生徒が、地雷廃絶という目標を見出したことにより動き出した。Tシャツは自分がデザインしたもので、全て手作り。生徒はこのTシャツを着て、学校へ、地域へ飛び出した。Tシャツを制作するまでの過程でひとりひとりの個性が現れた。そして、「そのTシャツは何？」と聞かれるたびに広がる地雷廃絶に向けてのメッセージは、生徒を成長させてくれた。

Tシャツは何度も着られることにより、その役割を果たしてくれるが、生徒の思いや出来上がったT

シャツの記録として残したいため、青森県高校総合文化祭の研究発表部門でこのプロジェクトを発表している。 DVD 【2005 3年電子機械科 メッセージTシャツ】



メッセージTシャツ制作に取り組む生徒と 完成したTシャツ

(ウ) 発信する高校生（映像制作）について

- ・実施クラス 3年電気科（2005年） 3年生全クラス（2008年）

3年電気科ではコンピューター好き、音楽好きが多い、メッセージをなんとか映像に出来ないか？そう、ジョン・レノンの「イマジン」のような美しい映像とメッセージをつくろう。

友達とふざけている姿ではなく、自分自身の中に秘めている、いつもと違う姿。そして心に秘める思い。それを表現したい。メッセージは伝えている。思いから始まる。知ることから始まる。伝えることから始まる。色々な始まり。この思いを持ち続けることが、世界を変えていくことにつながるのだ。

この取り組みの中で、いつもはふざけてばかりの生徒たちが、世界と向き合った。また、自分の思いを短い言葉にして表現するために、文と自分の言葉を真剣に考える姿勢が身についた。また、人の言葉にも真剣に耳を傾けるようになった。

このDVDは希望があれば貸し出し、文化祭や多くの学校の授業で活用していただいている。そして、このメッセージDVDを見た人たちから、高校生の思いについてさまざまな感想が送られてきている。

DVD【2005 3年電気科 Our Opinions】



メッセージCM 3E（3年電気科） our opinions で使用した写真

(エ) 発信する高校生 メッセージの発信について

- ・実施クラス 3年設備システム科

3年設備システム科では、メッセージ・シートの制作を通じて、自分たちの思いを伝える試みを実施した。

3年生の現代社会では、政治や経済だけでなく、世界のさまざまな戦争、平和、飢餓、貧困、差別、環境、福祉、国際協力などの物事について学んでいる。その中で第一に重要だと考えること。それは、さまざまなことに対して、興味関心を持つことであろう。そこが出発点となって、よりよい社会変革に向けての行動につながるであろう。

このクラスでは特に興味関心を持ったことを、自分や社会への問いかけという形にまとめている。映像によるメッセージは印象深いがいじくり読み取ることができない。しかし、メッセージ・シートならひとりひとりの思いを、じっくり伝えることができるのではないかと考え、この方法を選択した。

(オ) 世界平和に向けての取り組み＝戦争の事実を記録し伝える

- ・実施クラス 2学機械科・日本史選択者（2006年）

この実践は選択日本史の生徒が行った、自分たちができる平和への取り組みである。日本史を学習する中で、自分たちが何かを発信することで平和に役立つことはできないかと考えた。そして、実際に地域にいる、満州からの引き揚げ体験を持つ女性をお招きし、その方の作った満州からの引き揚げ体験を元にした「紙芝居」を見ることができた。その紙芝居を見た後、このお話と紙芝居を記録する必要性を強く感じるようになった。そこで、戦争体験、紙芝居そして生徒の平和への思いを映像としてまとめようとしたものである。少なくなりつつある戦争体験者のお話を後世にも伝えていくことで、平和に貢献できるのではないかと考えた。

実践は他の4クラスの授業とは別に放課後や休みの日を返上して行った。当然、部活動の関係などで大変な作業となったが、しっかりとした作品に仕上げることができた。

同様の取り組みは国際理解愛好会でも行っており、国際理解愛好会の取り組みは後述する。また、この映像は、「ガッコ・8歳の出来事」としてDVDに収録している。

DVD 【2006 平和祈念映像 ガッコ8歳の出来事】



紙芝居に見入る生徒と 紙芝居で戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える高屋敷さん

(オ) アドボカシー（提言による社会変革への取り組み）

この実践は高校生の意見表明の方法や社会参加の可能性を示唆する取り組みであると考えている。これは、コンピュータや情報網が発達した現代だからこそできる取り組みであり、新しい表現方法として、学習のまとめのひとつとして考えおこなった実践である。

・実施対象 3 学年 現代社会 および 国際理解愛好会

高校生にできる社会への参画方法として、アドボカシー（提言による社会変革への取り組み）の実践に取り組んだ。アドボカシーとはお金や物資の直接援助ではなく、キャンペーンなどにより存在する問題課題を多くの人に知らせ、国民の意思や思いを政治に反映させようと言う活動である。例えば、1990年代、アフリカの飢餓救済を目指した「ライブ・エイド」（We Are the World で有名）では、世界中の多くのミュージシャンが集まり、約260億円もの資金を集めたが、アフリカの飢餓救済のわずか1週間分の資金分であったという。しかし、2005年に展開された「ホワイトバンド・キャンペーン」では、途上国の貧困の原因となっている「途上国の累積債務問題」の約6兆円の解消に貢献したと報告されている。ホワイトバンドほど大規模でなくとも、高校生が自分たちの意見を表明することによって、社会の改善に参画する可能性を考えた。具体的には、自分が興味・関心のあるテーマを選び、それについて学習したあと、約30秒間のCMを制作し、公開するという取り組みである。

3年生現代社会の授業の取り組みの一環として実施に向けて進めていたが、実際にはコンピュータや使用するソフトの問題（使用料）など、3学年約150名で行うことが物理的に難しく、授業のあとにこのプロジェクトに興味のある生徒と国際理解愛好会の生徒で最終的な実践まで行った。

最終的には3本のCMを制作することができた。①世界の諸問題についてのCM、②地雷廃絶を訴えるCM ③薬物乱用防止に関するCM の3本である。その後国際理解愛好会でこのCM制作の目的、意味、そして高校生ができる社会への参画方法について、青森県高校総合文化祭・国際理解部・研究発表部門で発表している。また、発表内容をDVDに記録映像として残し、3学年現代社会の授業で発表するなどの活動につなげている。また、制作した「薬物乱用防止に関するCM」は、文部科学省が主催する、平成19年度「高校生の薬物乱用防止広報啓発映像コンテスト」に出品し、「文部科学大臣賞」を受賞した。作品は3月～12月まで開催される、サッカーJリーグの全公式戦でスタジアムの大型スクリーンで現在も放映されている。また、今年度の春の選抜高校野球、夏の甲子園大会、全国高校総体、そして、全国主要都市の該当に設置された広報ビジョンでも放映された。

生徒にとり制作過程の中で、著作権や肖像権といった多くの権利について学習する機会となった。そ

して、自分の作品が多くの場で放映されることで、行動することの大切さと、高校生ができる社会的行動、そして、社会変革の可能性を感じたようである。



DVD 【「高校生による薬物乱用防止広報啓発映像」
1分 「伝える国際協力」10分】

(カ) 発表の場をもとめて～スピーチでの取り組み～

一部の生徒対象であるが、授業や課外活動での学習の成果を、国際協力スピーチコンテストなどのコンテストに積極的に参加させている。目的は国際協力に関する自分の考えをまとめ、また、実際の国際協力の実践。または、実践に向けての意志をまとめたものが多い。

スピーチコンテストは、国連協会主催、高校生の国際スピーチコンテストや千葉商科大学主催の環境スピーチコンテストに参加している。国際スピーチコンテストには平成16年から取り組み、平成16年には優秀賞、平成18年、19年は最優秀賞を獲得し、青森県代表として全国大会に出場している。

また、千葉商科大学が主催する第一回環境教育スピーチコンテストでは、最優秀賞を受賞した。

参加した生徒は一様に「参加することの意義」を感じているようである。自分の意見をまとめ、人に理解・そして共感してもらえる形でスピーチにすることは非常に大変であるが、そのスピーチを完成させるまでの過程が生徒を成長させている。さらに、スピーチに取り組むことで、人のスピーチも真剣に耳を傾ける態度や、論理的にスピーチ内容を分析できるようになってきている。このことは、高校3年生が迎える進学、就職の試験でも生かされている。また、多くの観衆を前にしたスピーチは、精神的な強さをもたらしている。そして、入賞したことにより大きな自信となっている。



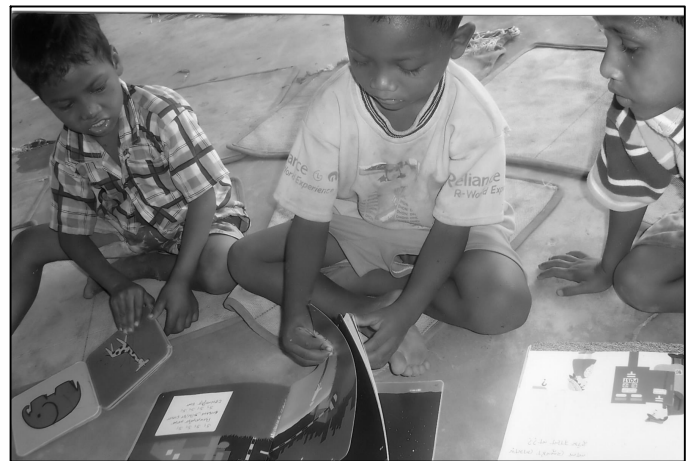
(2) 国際理解愛好会としての取り組み

国際理解愛好会としての取り組みは、

- ① インド・カンボジアへの国際的な支援活動
- ② 研究発表
- ③ 平和への取り組みなどが中心である。

① インド・カンボジア支援

インド支援については、8年前から行っている。支援開始当時インドについての知識やノウハウがなかったもので、青森市にある「あおりとベンガルをつなぐ会」(代表・青森県立保健大学准教授・千葉たか子先生)の協力を得て進めている。インド側はインド・西ベンガル州にある農村開発NGO、DR CSCに協力を得て実施している。これまでに行った支援は以下のとおりである。



- ・ **センター建設支援** 公民館的な機能を持った多機能施設の建設支援をおこなった。
- ・ **絵本支援** センター内に図書コーナーを設置してもらい、子供の娯楽と識字教育の推進を目的として、日本の絵本を送っている。絵本はベンガル語に訳すほか、インド側の方が絵を見て新しい物語を作るなどさまざまな形で活用されている。既に総計600冊以上の絵本を支援している。絵本は地域の保育園などの協力を得て回収しており、まさに地域を上げての国際協力活動となっている。さらに、回収ボックスは前述した「国際協力ボックス」を利用している。
- ・ **環境問題支援** これは、支援金の一部をインドにおける「環境教育」のテキスト作成などに活用してもらっている。インドでも環境教育の重要性は高まっており、その基礎的な環境に関する知識を学ぶために「環境教育の教科書」づくりを支援している。
- ・ **母親の自立支援** これは、乳幼児を抱えるお母さん形に、現金収入の技術を学ばせ、実際の収益を生み出すための支援である。実際には日本の小学生が利用し、その後使わなくなった「裁縫セット」を集め、その裁縫セットをインドに送り、インドのお母さん方に裁縫を教え、お母さんがたの経済的自立を支援するものである。



② 研究発表

- ・ 国際理解愛好会として力を入れている活動のひとつが研究発表である。研究発表は青森県高校総合文化祭での発表が中心であるが、この研究を通じてさまざまなことに関心を持ち、問題解決に向けて積極的に関わろうという意欲が生まれてきている。また、本校の愛好会の研究発表が他の学校と違うのは、映像制作を一緒に行い、研究発表を映像の形で記録し、研究発表以外の場所でも映像を積極的に活用していることである。研究を単に一回の研究発表会で終わらせることなく、同じ高校生の学びとして発信することで、より多くの高校生が国際問題に関心が向くことを目指している。

実際の映像は資料として添付しているので、是非ご覧いただきたい。

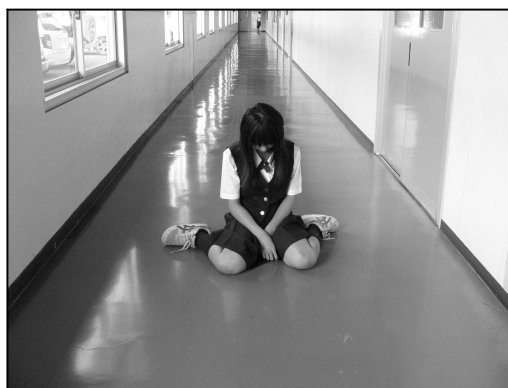
③ 平和への取り組み

平和はもたらされるものではなく、積極的に創造していくものである。その為高校生の何ができるのかを考え、平和祈念映像制作を行っている。教科での平和の映像制作と同様であるが、国際理解愛好会としても参加している。

④ 薬物乱用防止広報映像制作

これは二つの視点から始まった取り組みである。第一に前述した薬物問題に対するアドボカシーをひとつとして取り組みとしての映像制作と、純粋に薬物問題についての研究を行う中で、自分たちにできる取り組みとして行った映像制作である。今回3回目の取り組みとなるが、今回の生徒は先輩が取り組んだ薬物問題について、継続して実践していこうというものである。

国際問題としての薬物については、平成20年度青森県高等学校総合文化祭で研究発表としてまとめており、その一環として「薬物乱用防止広報啓発映像」(30秒のCM)を制作している。作品は平成19年度に続き2年連続で「文部科学大臣賞」を受賞し、現在もサッカーJリーグ公式戦で、会場の大型スクリーンを活用し放映されている。



② 戦争の事実を記録し伝える Part2 平和祈念映像制作

平成17年度に2学年の「日本史」選択者で制作したDVD映像のPart2として制作した。前回のDVDが紙芝居を映像として残すという作業であったのに対し、今回は紙芝居を制作した満州引揚げ体験者の平和への思いと高校生の思いを、「すいとん」という食べものをキーワードとして制作した。いわば、前回の「ガッコ・8歳のできごと」を補完する作品とした。

制作したのは国際理解愛好会のメンバーである。国際理解愛好会活動の大きな目標は、世界平和構築にむけての行動である。自分たちが興味関心を持ったことを、自分たちの視点で伝えようとした行動である。映像は前年同様、多くの方に見ていただき、関心を持ってもらいことを目的として、高校生の平和祈念映像制作コンクールに出品している。

単年度で終わりがちな取り組みを、複数年にわたって取り組めたことに大きな価値があった。戦争体験者の話をさらに掘り下げて何うことができたからである。また、作品をDVD映像としたことで、前年の作品同様、多くの平和の集いなどで上映している。

視聴していただいた多くの方から、「今の高校生に平和の希望を見つけることができた」という感想をいただいたことが、生徒の活動へのなによりの評価だと考えている。

（３）学校としての取り組み

学校としての取り組みは、授業や愛好会活動で接することのない生徒に対し、世界で起こるさまざまな問題に興味関心を持ってもらいたいという意図がある。その内容も講演会やコンサート（地球のステージ）などの世界の様子を知り共感する内容と、募金や活動支援など実際の国際協力活動の二本立てになっている。

「心を育てる」

高校生の多くが、世界的な問題と自分の生活のつながりを考えることなく生活し、また、つながりを考えようとしめない生徒も多い。全ては「興味関心」から始まると思っている。世界のことにどれだけ興味を持たせ、その上で、自分とのつながりを考えてほしい。そのためには、世界の現状を伝えることが重要だと考えた。以下は代表的な学校全体での活動である。

① 「地球のステージ」

地球のステージは現在宮城県在住の精神科医、桑山紀彦氏が作り上げた世界を知り、世界とのかかわり、共生と協力、生き方などを考える、コンサートステージである。本校ではこの公演を毎年行っている。世界の現状を伝える人、国際協力の現場に立ち活動を行っている人、写真や映像技術を持った人、歌でメッセージを送る人、以上４つの分野についてのエキスパートは存在するが、この４つのことを同時行っている人は桑山紀彦氏以外に見つけることができない。桑山氏はその意味では稀有な才能と能力、そして何よりも情熱を持ち、真摯に取り組んでいる人である。



桑山氏の国際協力活動や世界でのさまざまな問題を伝える「地球のステージ」を通じて、世界に興味関心を抱き、自分でできる活動を始めた人も多い。本校では桑山氏の「地球のステージ」を国際理解または世界と自分たちの行き方を考える上でも重要な授業と考え、８年間連続して公演を実施してきた。連続の公演をマンネリ化と捉える見方もあるが、毎年開催により、桑山さんや国際協力活動が身近なものとなり、国際協力への関心が高まっている。桑山氏の海外での活動を通じ、自分の知る身近な人が活躍する活動として、世界を世界で起こる問題を自分に引き寄せて考えることができている。

卒業生の多くが卒業も日本各地で開催される「地球のステージ」に足を運び、「また、自分のできる小さな実践を積んでいる。

② インド支援（国際協力活動）

これは国際理解愛好会の活動でも紹介した「インド支援」を、生徒会活動として継続的に取り組んでいる。具体的には文化祭での売り上げの一部を国際協力資金として毎年支援している。支援先はインドの村落開発NGOであるDRCSCと、青森発信の国際協力NGOである「あおりとベンガルをつなぐ会」（通称ABA）を支援している。文化祭の売り上げをクラスや個人のものだけにせず、一部を国際協力の役立てようという趣旨で毎年行っている。支援額は約５万円から１０万円と年度により異なるが、生徒の思いが国際協力に役立っている。資金を元に行われてインド側の事業としては（１）多目的施設

建設支援（他のNGOとの協力事業）（2）保育園や田目視説での識字教育のための図書コーナー設置支援（本校単独事業）（3）環境教育テキスト制作事業（NOとの共同事業）支援はインドのNGOやABAからの依頼や、話し合いで実施内容を決定している。

③ JICAとの共催・共同事業

これは、青年海外協力隊員の帰国報告会や、JICAネットを利用した国際会議、JICAをはじめとする国際協力活動の紹介などを行っている。

現在、本校にいる青年海外協力隊OBは私ひとりだが、以前はJICA短期専門家としてサウジアラビアで活動された先生、さらに本校に勤務していた教員が青年海外協力隊としてカンボジアでの活動に参加している。身近な人が参加した国際協力活動への関心は高く、カンボジア派遣前から連絡を取り合っていた。任期中には任国カンボジアとJICAネットを活用した国際会議の実施し、帰国後は活動報告会と活動の様子を伝える写真展などを開催している。

さらに、国際理解愛好会では本校で国際協力に関わった3人の教員から、「国際協力という生き方」を学び、そのことを研究発表としてまとめている。

【平成7年度青森県高等学校総合文化祭・国際理解部・研究発表部門・最優秀賞】



3 評価および課題

(1) 評価

グローバル教育を、教科、国際理解愛好会活動、学校での取組みの3つの面から報告してきた。生徒は国際理解、平和活動、国際協力、CM制作、コンテストなど全ての分野で、そのテーマに対し主体的、能動的に関わることで、様々なことに対する興味・関心が高まった。また、ひとつひとつのプロジェクトを進める中で仲間とのコミュニケーションや人の話を聞くといった、基本的だが大切な態度やスキルが身につけてきている。

また、本校で積極的に取り組んでいる「発信する・伝えるという行動」は、その活動が ①興味関心→②学習（調べる・聞き取り・体験といった参加型・体験型の学び）→③行動・発表 という過程を経ることで、段階的に進むばかりでなく、行動による自分と周りの変化を感じている。

さらに、さまざまなコンテストや研究発表にチャレンジすることで、より深い知識やプレゼンテーション方法をはじめとする表現・伝達技術が向上している。コンテストや研究発表は、入賞することにも大きな意味があるが、それまでの過程こそが生徒にとっての大きな財産となっている。入賞しなくとも、その活動や研究が評価されることにより、大きな自信と自己肯定感がもたらされている。生徒ひとりひとりが大きな達成感を得ると共に、人間的な成長を感じることができた。

世界の変化は、また、生徒（人間）の成長と共にある。

(2) 課題

- ① グローバルシチズンシップの育成に必要なこと、第一に実際の問題と自分たちの生活や問題意識が乖離しないようにすることである。

Think Globally, Act Locally 地球規模の大きな視点で考え、行動は身近なところから改善されなければならないと考えている。問題をいかに自分たちに引き寄せて考えることができるか、また、心のアンテナを広げてさせることの重要性を感じた。

- ② 学習時間の確保 どの実践にも言えることであるが、時間の確保はこれからも大きな課題となる。私自身もグローバル教育、教材研究に積極的に取り組むほか、国際理解愛好会の顧問、陸上競技部顧問、ほか多くの仕事を抱えながらの取り組みである。多忙化の中での展開を考えていきたい。
- ③ グローバル教育展開の場の確保 教科でできなければ、国際理解愛好会活動で、それでも難しいなら学校行事で。自分で出来るグローバル教育の場面について、私の報告が参考になれば幸いである。

まとめ

「地球人として生きること」とはなんだろう。

ここまで、情報化が進み世界の出来事を簡単に知りえる環境が整ってきたにもかかわらず、地球人としての意識、この時代に共に生きるものとしての連帯感も感じにくい。

私は「宇宙人に来てほしい」と願っている。バカな話といわれるかも知れないが、宇宙人の存在によって、われわれ「地球人」という感覚が生まれると思っている。

とはいっても、実際に宇宙人が来るのはいつかわからず、その間に地球規模での問題・課題は急速に進み深刻化している。

では、必要なことはなにか、それは、「地球人としての学び」だ。

グローバル教育、開発教育、国際理解教育はその可能性を持っている。この教育がひとつの教科として成立して欲しい。それも、先進国、途上国すべての国で学ぶ教科として。グローバル教育が一部先進国

のものであってはならない。地球規模の問題は「地球全体で取組むべきものなのだ」

そのために、教育の果たす役割は大きい。

グローバル教育実践の中で見つけたもの、それは「希望」「可能性」「夢」そして、「自信」であった。学習成果はひとりひとりにかえり、そして、その行動は国際協力、平和活動、環境問題への提言と広がっていった。彼らの成果であり彼らが誇りを持っていることを嬉しく思う。

人間は「希望」を見出したときに生きる力を得ると思う。知識が単なる知っているという段階の知識としてではなく、何かを変える、何かを動かす力に、きっかけになってほしい。そして、その力が自分たちにあることを信じての欲しい。そのためには、行動すること、発信することが大切なのだと。

今、中学校時代の恩師の言葉を思い出す。「知識が全てではない」

生徒の取り組みを振り返り言葉の重みをかみしめている。

〔2005-2007 青森県立むつ工業高等学校 国際教育・平和教育プロジェクト〕

内容	1	2005年	3年電気科	「Our Opinions」	(平和へのメッセージ映像)	10分
	2	2005年	3年機械科	「ぼくらの国際協力」	(国際協力ボックス制作について)	10分
				青森県高校総合文化祭	国際理解部 研究発表部門 優秀賞	
	3	2005年	3年電子機械科	「メッセージTシャツ・プロジェクト」		10分
				地雷廃絶に向けたメッセージTシャツの作成		
	4	2006年	国際理解愛好会	研究発表「国際協力という生き方」		10分
				先生方の国際協力から自分たちの国際協力・生き方を考える		
				青森県高校総合文化祭	国際理解部 研究発表部門 最優秀賞	
	5	2006年	2年機械科	「ガッコ・8歳の出来事」		10分
				満州引揚げ体験者の方が作った「紙芝居」の映像化と、		
				高校生の平和への思いをまとめたもの		
	6	2007年	国際理解愛好会	「すいとんの味」		10分
				満州引揚げ体験者である「ガッコ・8歳の出来事」の作者の		
				平和に対する思いを映像にしたもの。(ドラマ)		
	7	2007年	国際理解愛好会	研究発表「伝えるという国際協力」		10分
				国際協力の方法として、アドボカシーを取り上げるとともに		
				自分たちでメッセージ映像の制作を行った。		
				青森県高校総合文化祭	国際理解部 研究発表部門 優良賞	
	8	2007年	国際理解愛好会	「薬物乱用防止広報啓発映像」		1分
				文部科学省主催「高校生による薬物乱用防止広報啓発映像」		
				参加作品	文部科学大臣賞 受賞	
	9	2007年	国際理解愛好会	「世界はもし100人の村だったら」		1分
				世界の状況についてのメッセージ映像		
	10	2007年	国際理解愛好会	「No More Landmine」		1分
				地雷廃絶を訴えるメッセージ映像		

「青森県立むつ工業高等学校・国際理解愛好会・現代社会実践記録 H19-20」

	1	2008年	国際理解愛好会	研究発表「薬物問題・私たちの取り組み」		10分
				薬物に関する国際的な問題と身近な問題を迫及した作品		
				映像の一部は 文部科学省主催「高校生による薬物乱用防止広報啓発映像」		
				に出品し、文部科学大臣賞を受賞(2年連続)		
	2	2008年	薬物乱用防止広報啓発映像	文部科学大臣賞受賞作品	Vol. 1	1分
	3	2008年	薬物乱用防止広報啓発映像	文部科学大臣賞受賞作品	Vol. 2	1分

- 4 2008年 国際理解愛好会 研究発表「もったいないって何？」 10分
失われていく動物の命から、飢餓で失われる人間の命まで、命の大切さを
考えさせる作品
青森県高校総合文化祭 国際理解部 研究発表部門 で発表
- 5 2008年 国際理解愛好会 研究発表 「むつ工高・国際理解愛好会の歩み」 10分
本校国際理解愛好会の歩みを紹介
青森県高校総合文化祭 国際理解部 研究発表部門 最優秀賞
- 6 2007年 薬物乱用防止広報啓発映像 文部科学大臣賞 受賞作品
- 7 2007年 国際理解愛好会 研究発表「伝えるという国際協力」 10分
国際協力の方法として、アドボカシーを取り上げるとともに
自分たちでメッセージ映像の制作を行った。
青森県高校総合文化祭 国際理解部 研究発表部門 優良賞
- 8～12 2008年 現代社会プロジェクト メッセージ映像